



松木 傑 (トランスフェアジャパン
事務局長, 40歳)

昨年11月、日経流通新聞がジュネーブ発信で「途上国からの公平貿易品 スイスでフェア拡大」を伝えている。すでにパナナで10%、コーヒーで5%の国内シェアを獲得したとある。

フェアトレード(公平貿易)のはじまりは、1967年にオランダの教会青年たちが、ハイチのラムから手工芸品を輸入したことからだとされる。1969年には、最初の「第三世界ショップ」が開かれた。その後ヨーロッパ各国と北米へと広がり、現在では、数百店舗が開かれている。しかし、それは限られた市民による消費者運動であって、一般のマーケットとの接点はなく輸入額も限られたものであった。

そこで、もっと買って欲しいという生産者の声に答えて考えだされたのがFLO(Fair Trade Labelling Organizations International)フェアトレードラベル運動である。

1988年にオランダで(名称、マックスハベラー)1992年にドイツを中心に(名称、トランスフェア)ラベル運動がはじまった。最初のラベル商品は、コーヒーである。基準を設定することにより、一般のコーヒー業者が、公平貿易品を扱うことができるようになり、スーパーにもラベル商品が並んだ。

コーヒーの基準は、最低買入れ価格の保証、長期的な売買関係、前払いの三つである。この条件を守って輸入されたコーヒーには、公平貿易品であ

フェアトレード最前線

ることを表わすラベルを貼ることが許され、消費者はそのことを理解して、あえてラベルコーヒーを選んで購入するのである。ドイツやオランダ、スイスといった現在の運動を引っ張っている国では、すでに50%以上の人たちがラベルの意味を知っているほどに普及している。

コーヒーの成功は、ドイツでは一つのブームとなり、次のラベル商品である紅茶が売り出された1995年には90%を超える紅茶業者が、トランスフェアと契約を結んだ。すでに、砂糖カカオ、蜂蜜、バナナは商品化され、現在、オレンジジュース、布製品、切り花、海老などの海産物、サッカーボールなどが検討中である。

1997年の加盟16ヶ国の全体実績は、ラベル付きコーヒーの売上げは一万六千トン、紅茶三百二十四トン、始まったばかりのパナナは、一万二千トンに達している。スイスでは、新聞記事後も比率をのぼし、パナナは、国内市場の12%、コーヒーは5%であった。ここまで成長すると単なる意識ある市民による運動のレベルから、日本における環境問題の広がりと同様に業界でも取り組むべき課題であるといえる。



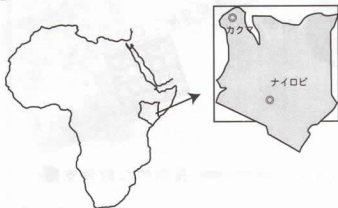
日本が加わった当時は、加盟国がトランスフェア5ヶ国、マックスハベラー3ヶ国で計8ヶ国であったが、現在では16ヶ国まで拡大してきた。国ごとにラベルのデザインが違っているのは不都合なので現在一つのラベルにするための委員会がすでに準備している。現時点での、二つの候補のロゴと日本から行って行くデザインコンビピア堀木さんのロゴ



日本では1993年11月に、いくつかのNGOと教会団体が集まってトランスフェアジャパンが設立されたが、なかなか市場に受け入れられるまでになっていない。日本のマーケットの状況を考えると、消費者と生産者を国際的につなぐこの連帯運動の本格的な担い手は、生協をおいては考えられない。そういう訳で、この運動に加わるように生協にすすめ、昨年、春には、取り組むことが決まっていたが、歴史的というほどのコーヒー豆の高騰でいまだに実現できないでいる。

難民支援プロジェクト

ケニア カクマ難民キャンプ



カクマ難民キャンプとわかちあいプロジェクト

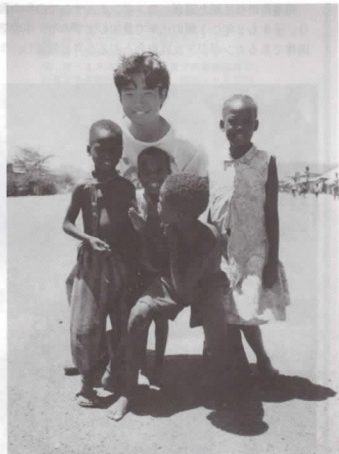
今年、6年目を迎えたカクマ難民キャンプは、ある程度安定した状況を保っている。キャンプ内は小さな町のように、コミュニティは発達している。しかし、自国から離れた難民達がキャンプに安住しているわけではない。誰もが心の傷を持ち、精神的不安を抱えている。そして、彼らは人としての威厳を保ち、故郷でもう一度暮らせる日を夢見ている。長期に渡るキャンプ生活の中で、食料や水、住居、医療などの物的援助が必要なのももちろん、帰還後の社会的自立のための援助、自助努力のためのサポートが必要なのである。

わかちあいプロジェクトは、1992年秋、ルーテル世界連盟(LWF)が行っていたソマリアに救援物資を空輸する救援活動に参加することから始まった。そのことがきっかけで難民キャンプとの関係が生まれ、1994年から、カクマ難民キャンプへボランティアを派遣し、今年で5回目になる。キャンプ運営の中心となっているLWFと連携し、現地では何を必要としているかを調査して、資金を集め、毎年7~8名の学生などのボランティアを送り出している。

93、94年は子どもの古着、95年は古着と300個のサッカーボールを送ると共に、幼稚園の建設の最初のワークキャンプを行い、96年は外来病棟の建設に従事した。このキャンプの最大の特徴は少年、青年が全体の4割を占めていることであり、大部分の難民が教育の整備されていない農村部出身のため、識字、技術に大きなハンディがある。そこで、昨年は、彼らが故郷に帰ったときの自立を助けるため「SELF HELP, セルフヘルプ」プロジェクトに参加し、職業訓練校の建設を行った。訓練の内容は、農業技術、作圃、木工、理髪、洋服、魚網制作、大工、自転車修理などである。

キャンプでの学びと協力

- 93年3月 松木訪問
- 6月 第1回古着、カンパン支援
- 94年夏 大学生2名キャンプで研修
- 第2回古着支援
- 95年夏 青年9名 第一回ワークキャンプ
- 幼稚園建設
- 96年夏 第2回ワークキャンプ 7名
- 外来病棟建設、中古四輪駆動車寄付
- 97年夏 第3回ワークキャンプ 7名
- 職業訓練校建設
- 98年夏 第4回ワークキャンプ
- (計画) 図書館建設 中古14トントラック寄付



阿久津さんと子どもたち